

発寒ひかり 保育園だより

2020年
12月号

巻頭言

「ぼくの名前はひかり！なんだか最近、元気がでないんだ。」「ひっひっひっ」おやおや？バイキンくんが……

これは、子どもたちに新型コロナウイルスに負けない免疫力をつけてもらおうと、保育士が作った紙芝居の冒頭です。子どもたちは、笑いながらも真剣に見入っていました。また、あるファミリーでは、看護師のお母さんたちがとてもご苦労されていること知り、みんなで励まそうと話し合っています。（裏面に写真）

さて、最近、子どもの将来にとって、大変不安を抱かせる出来事がありました。日本学術会議会員の任命拒否問題です。理由は明らかになっていませんが、6人の方は、安保法制や秘密保護法などに反対してきた方々であることが分っており、戦前のような人権弾圧の始まりになることが心配されているのです。

戦前、軍部や政府の考えに反する人たちが弾圧され、学者は大学を追われ、日本はファシズムと戦争へ突き進みました。当園の母体である札幌独立キリスト教会の創立者である内村鑑三と新渡戸稲造の弟子、矢内原忠雄東京帝大教授も大学を追われ、矢内原と同じく内村の非戦・平和を唱える無教会主義キリスト者浅見仙作も治安維持法違反で牢につながれました。（裏面に資料）

日本国憲法は、これらの歴史的反省に立って、国民の幸福追求権や表現・思想良心・信教・学問の自由などの人権を手厚く保障し、戦争放棄を定めているのです。日本学術会議も、学問の自由を守り、戦争に協力しないことを決議しています。

今年のクリスマスは、コロナ対策を講じ、子どもと職員でイエスの生誕をお祝いする会を実施することとしました。コロナの収束を願い、愛と平和の主のお守りを心より祈りつつ。

園長 吉田 行男



真剣に見ている子どもたち



矢内原忠雄（やないはらただお、1893年-1961年）

旧制第一高等学校在学中に無教会主義キリスト者の内村鑑三の聖書研究会に入門、キリスト教への信仰を深めていった。東京帝大に入学後は、吉野作造の民本主義や、人道主義的な立場から植民政策学を講じていた新渡戸稲造の影響を受ける。1920年（大正9年）、新渡戸稲造の国際連盟事務次長への転出に伴い、後任として母校の経済学部助教授となる。同年欧米留学。1923年教授に就任し、植民政策を講ずる。矢内原の植民政策学は、統治者の立場から統治政策として考えるのではなく、社会現象としての植民を科学的・実証的に分析している点に特色がある。



1937年、盧溝橋事件の直後、『中央公論』誌に「国家の理想」と題する評論を寄せた。国家が目的とすべき理想は正義であり、国家が正義に背反したときは国民の中から批判が出てこなければならないことなど、民主主義の理念が先取りして述べられていた。しかし、この論文は大学の内外において矢内原排撃の恰好の材料として槍玉に挙げられ、個人的に発行していたキリスト教個人雑誌『通信』の発言も問題となった。1937年（昭和12年）、事実上東京帝大を追放される。1937年12月出版の『民族と国家』も発禁処分になる。辞職後は『嘉信』を毎月発行し、自宅で若者に聖書の講義をしたりしてキリスト教信仰に基づく信念を堅持し、平和主義を説き続けた。

敗戦後の1945年（昭和20年）、東京帝大に復帰した。1951年（昭和26年）東大総長に選出される。1952年（昭和27年）警察による学内スパイ活動が露見し、矢内原は総長として大学の自治と学問の自由を守るために毅然とした態度を取った。

退任後も精力的に講演活動を行う。1961年、札幌市民会館において北海道大学の学生のために「内村鑑三とシュバイツァー」と題して、「立身出世や自分の幸福のことばかり考えずに、助けを求めている人々のところに行って頂きたい」として「畑はひろく、働き手は少ない」という聖書の言葉で結んでいる。

（エピソード）

矢内原と親交があった長谷川町子は、「（矢内原は）厳格なお顔の割に、可愛いものがお好き」であり、矢内原が晩年に入院した際には長谷川がクマの玩具を見舞品として贈ったと『サザエさんのうちあけ話』の第29章で触れている。

浅見仙作（あさみせんさく、1868年-1952年）



1898年、大洪水のため石狩川が氾濫、50町歩の土地をすべて失い、キリスト教に回心。1903年、さらにキリスト教を学びたいと内村鑑三の『聖書之研究』を読み、その絶対非戦論と無教会主義に感激、共鳴し、札幌を拠点として北海道各地への独立伝道活動を開始する。非戦の文章が官憲の目にとまり発売禁止。度々取り調べを受け、刑務所独房収容などの弾圧を受ける。さらに治安維持法違反により投獄。1945年、矢内原や無教会主義キリスト者たちの支援を受け、終戦の2カ月前に大審院で無罪を勝ち取る。

その後もひたすら聖書に根ざした伝道を、雪深い北海道の開拓地や刑務所で続けながら、非戦・平和に生き抜いた。